

「つらら」

この絵は昨年2月初旬に埼玉県秩父市大滝^{みきつた}三十槌で体験した風景です。

三十槌は秩父駅から道路で西へ約25kmの荒川に沿った所にあります。この三十槌という地名は近くの集落・三十場と槌打の名から来ているということです。

ここで秩父を少し紹介します。当地はその昔知夫国と言われ、馬や銅の産地として名高く、交易範囲は広がったと思われます。特筆すべきは、この地で産出された純度の高い自然銅から日本最古の貨幣・和銅開珎が708年（和銅元年）に作られたことです。このような歴史を背景とした秩父の夜祭が京都祇園祭、飛騨高山祭ともに日本三大祭として有名です。

つららの語源は、古来は氷など表面のツルツルした光沢のあるものを“つらつら”と表現した、とあります。“つらら”を漢字で“氷柱”とする表記もありますが、“水の柱”と区別するためここでは敢えて“つらら”としてみました。

三十槌のつららを付ける崖は荒川の河川敷（標高約410m）から10m程の高さです。上流の奥秩父を形成する標高2,000m級の東アルプスからの水がこの渓谷を形作ったのでしょうか。なお奥秩父という範囲ははっきりとしたものでなく、大正時代から始まった近代登山がこの辺りより奥地にまで入り込むようになり、使われ出したようです。

崖の岩にはそれ程極端な色の差は無く、僅かな変化を捉えつつ筆を進めました。岩肌から滲み出た水のつららがこの崖を上手く舞台にしているように伝われば嬉しいのですが。



菊岡 保人

Size : 530×455mm (F10)

